

学習成立の技法 様々な指名の方法を使いましょう。

前回、私は「発問したら、まずノートに書かせよう」ということを主張しました。

これは、重ねて記述することになりますが、要するに「優等生」ばかりに頼らずに、すべての子どもを学習に参加させましょうということを言ったわけです。

さて、技法 はそれとたいへん関わりが深いのですが、挙手ではなく指名するときには、指名の方法を様々な使いましょう、ということです。

例えば、次のような指名方法があります。

「たくさん書きなさい」と指示した場合 「1つかけた人、立って発表しなさい」順に「2つ書いた人発表しなさい」とします。これは、書いた数の少ない子が先に指名する権利があるので、「できる子」がしゃべりすぎる授業を防ぎます。かつ、「同じことは言わなくてもよろしい」と指示すれば、ほかの子の発言も聴いていなければならず、集中度が増します。

列指名し、その後「これ以外の意見を持っている人起立」と訊ね発表させる方法があります。これも先に行ったこの意見を聞いていなければ反応できないわけです。

ランダム指名（これは机間巡視後の意図的な指名になる）これもある種の緊張を子どもに与えることができます。

こうしたいくつかの指名の方法を組み合わせることで授業が、緊張感のあるものになります。

学習成立の技法 か×か書かせる

授業で、もっとも子どもが気を抜くのは、他の児童が発表しているときです。

そうした、ゆるみを防ぐのが か×か書かせるという方法です。

例えば、奈良時代の学習で「大仏を作るための材料を、庶民は喜んで出したか。」と問います。そして、すぐに、前にいる児童を指名。

すると、その子は「出したと思います。大仏様の効果を信じていたと思います」と答えます。

そこで、全体に「いまA君が言った答が正しいと思った人は、いや違うと思った人は×をノートに書きなさい」と指示します。

こうすることで、授業は常に緊張のあるものとなります。

なぜなら、人の意見を聞いていなければ、か×かを書くことができないからです。

つまり、「×を書かせる」ということが、授業中に発表されていることすべてを、常に自分事として受け止めさせる装置になっているわけです。

所見を書く

教師成り立ての頃、とにかく所見を書くことが苦痛でした。

時間をかけても、灰皿に積まれたたばこばかりが増えて、まったく所見がかけなかった記憶があります。

今もそんなにすばらしい所見がかけるわけでもありませんが、当時はひどいものでした。

さて、所見というのは、どのような内容で、いかに書けばいいのでしょうか。

私なりのポイントを書こうと思います。

まず、第一に、他人の所見を100程度読むこと。

粗く言って、所見の書き方には次の二層の問題があります。

一つは、何を書くかという「内容論」、もう一つはどう書くかという「形式論」です。

これら二つをイッキに短期間に身につけるには、先輩の書いた所見をできるだけたくさん読むことが一番いいのです。

第二に、子どもの事実を集めておくこと。

良い所見とは、

その所見に当てはまる子は、その子だけである

という所見です。書かれた所見が、誰にでも当てはまる、そんな一般的な所見を誰がうれしく思うのでしょうか。

そこで、普段から記録をとっておくことが大事です。しかも、具体的な記録です。「いつ、その子が、なにを、どんなふうにしたか」という記録です。

第三に、安定した書式を手に入れること。

私が、使っている書式は、次のようなものです。

子どもの名前 + 具体例 + 評価語

例えばこうなります。

「毎日の掃除で、　　さんは、ぞうきんを固く絞り、黒板の下や棚の隙間など、汚れやすいところを見つけ、力を込めて、丹念に拭いてくれています。そうした物事を丁寧に行う姿は、たいへん立派です。学級の良いお手本でもあります。」

あまりうまい所見ともいえませんが、最初の頃よりは良くなったということです。